OVERSEAS　海外事情

Republic of Indonesia
—インドネシア共和国—

インドネシア・ジャカルタ滞在記

田中 直樹　TANAKA Naoki
八千代エンジニヤリング株式会社／総合事業本部／構造・橋梁部／主幹

若い技術者の海外研修先

成田空港から飛行機で7時間半、南半球に位置するインドネシアの首都ジャカルタは、比較的古くから日本と技術交流が行われてきた土地であり、日系企業も多く進出している。そのため、若い技術者の海外研修先としても人気が高い。国内専門だった私が30代前半に初めて経験した海外出張先はインドの地方都市であったが、そこで出会った日本人のベテラン技術者も皆ジャカルタ経験者であった。その後、ジャワ島の鉄道業務に携わることになり、拠点となるジャカルタを何度も訪れた。先輩方からの受け売りの部分もあるが、発展著しい今のジャカルタを紹介する。

近くて遠いジャカルタ中心部

ジャカルタの玄関口であるスカルノハッタ国際空港に到着すると、南国の空気が我々を熱く歓迎してくれる。時間のかかる入国手続きを機内で済ませられるガルーダ航空便は、到着後のストレスが少ないので助かる。残念ながら機内入国審査は2015年より中止された。空港の出口には多くの両替商が軒を連ねて我々を待ち構えており、様々なレートを示して懸命に誘ってくる。空港で大金を両替することはないので、レートの差などあまり気にしなくて良いのだが、ついついお得な方に目が行ってしまう。しかし、ここで注目すべきは両替商の手元であって、レートが良くても低額紙幣である5万ルピア札（約500円）で両替する店は怪しい。お得なレートに釣られた無防備な観光客は、大量の5万ルピア札を受け取りルンルンであるが、その場で確認しないと大損している場合がある。日本では大騒ぎになるミス（故意）も「枚数が多いから間違っても仕方ないよね。てへっ」で済まされるところが怖い。

写真1　送迎の車が溢れる空港前

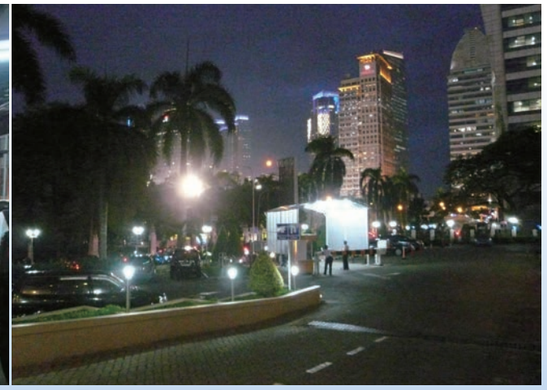

写真2　電飾で彩られた高層ビル

空港とジャカルタ中心部は高速道路で結ばれており、車で僅か30分程度の距離なのだが、いつも今日は盆か正月か?というほど渋滞がひどい。空港でしっかりトイレを済ませておかないと、目的地までの2～4時間、車内でモジモジしなければならない。渋滞のひどさはインドと大差ないが、安全や騒音に関してはこちらの方が随分ましである。車間距離に余裕があるし、なによりクラクションを鳴らす車が少ない。日本人もなかなか手が出ない高級車も多く走っており、タクシーまでベンツなのには衝撃を受けた。これが貧富の差というものか。都市部の高層ビルは、様々なイルミネーションに彩られており、街に個性が与えられている。日本の無機質な高層ビル群が写し出す夜景とは趣が全く異なるが、これもまた美しい。結局、ホテルへの到着はいつも日本時間の0時過ぎになる。家族や会社に安着連絡を入れるためインターネット接続を試みるも、回線品質が悪く繋がらない場合が多い。何をやるにも予定通りに進まないのが海外生活である。

現地で喜ばれるお土産

職場に向かい、日本から持参したお土産を配る。最も喜ばれるお土産は「柿の種」である。普段は菓子類に手を付けない現地スタッフも、柿の種だけは休憩の度に1粒ずつ時間をかけて楽しんでいた。受験生に人気の「キットカット」も、日本限定品など様々なバリエーションがあって珍しいと喜ばれる。

ちなみに、現地滞在の長い日本人向けのお土産は酒類に限る。イスラム教徒の多いインドネシアではアルコールが厳しく制限されており、現地の日本料理店では日本の酒が定価の10倍以上で提供されていた。下町のナポレオンがなんと1万3千円である。私は酒が弱いので不自由しないが、晩酌が欠かせない人には暮らしにくい国だと思う。

気候と服装

赤道に近いジャカルタは日本より暑いイメージを持っていた。確かに暑い国ではあるが、年間を通じて気温は30℃程度であり、東京のように異常な猛暑に苦しむことはない。職場では日本でも浸透してきたクールビススタイルが主流であり、重要会議のためにと持ち込んだ上着やネクタイは荷物になるだけであった。現地スタッフには民族衣装のバティックを着用して職場に来る者もいる。カジュアルデーである金曜日には、我々日本人技術者もバティックを着て現地色に染まる。バティックは大統領が着る1着数万円の高級品から千円以下のセール品まで質もデザインも豊富にあり、見る人が見れば、出身地や暮らしぶり、人柄まで分かるそうだ。大切なコミュニケーションツールの一つであり、これを着こなしてこそ一流の現地技術者と言えるのかもしれない。

写真3　バティックに着替えて現地調査

写真4　絶品のサテ・アヤム

また、土砂降りの雨もジャカルタの名物である。私は幸か不幸か雨季にジャカルタを訪れる機会はなかったが、その時期に現地入りしていた同僚からは「道が冠水して身動きがとれない」「先方も出勤できず打合せがキャンセルになった」など、日本では下手な言い訳にしか聞こえない珍事も度々起こった。

言葉の壁

公用語がインドネシア語であるため、教養レベルが高いはずの公務員に対しても英語が通じにくい場面が多かった。海外業務を希望する日本人には、流暢な英語でテキパキ仕事をこなす姿に憧れを抱く人も多いと思うが、流暢なインドネシア語でプレゼンを行う技術者も想像以上に魅力的であり、現地の人々の心を鷲掴みにしていた。英語が世界の共通語であることは間違いないが、英語だけでも通用しないことを実感した。私は未だ習得するに至っていないが、インドネシア語はマレー語圏（シンガポール、マレーシア、ブルネイ）でも通じるお得な言語なので、これらの国に活躍の場を広げたい方は是非習得していただきたいと思う。

日本人にも馴染みやすい食べ物

ジャカルタの食べ物は安くて美

写真5　衛生的に敷居の高そうな露店

写真6　ジャカルタの観光名所モナス

味しい。民族料理であるナシゴレン（焼き飯）やミーゴレン（焼きそば）、サテ・アヤム（焼き鳥）は、日本人にも抵抗なく受け入れられるメニューである。生野菜は腹を壊すので避けた方が良いと言われていたが、運動不足に加えて野菜不足になっては困るので、あえて積極的に野菜を食べるようにした。確かに日本では経験したことのないレベルの腹痛に襲われることもあったが、人間の体の適応能力は素晴らしいもので、胃腸さえ順応してしまえば怖いものは何も無かった。日本人が腹を壊すのは、幼いころから清潔すぎる環境で育てられた弱さの賜物だと思っていたが、インドネシア人も日本で食事をすると腹を壊すそうなので、衛生面だけの問題でもないようだ。

事務所の近くにある有名なサテ・レストランでは、屋外で仕込みを行うためハエとの戦いが日夜繰り広げられていた。現地経験の長い先輩は「新鮮で安全な肉を使っている証拠」と気にしていない様子であったが、食材の産地や製造過程など、詳しく知らない方が良いことが海外にはたくさんある。

海外生活ではなるべく日本食を避け、現地の食事や文化に接するのが私なりの美学であったが、滞在期間が長くなるにつれてそんな意識は薄れていった。イスラム教では御法度のトンカツを食べられる日本料理店など、情報を入手しては開拓に努めた。

余暇の過ごし方

インドネシア観光の主役と言えばバリ島だが、そんなに遠出をする余裕はなく、貴重な休日には近場の国立博物館やモナス（独立記念塔）を訪れて、インドネシアの歴史に触れることが多かった。日曜日の午前中は、いつも車でギュウギュウ詰めの大通りが歩行者天国として解放されるので、ランニングをしながら街を違った目線から見ることができた。近隣都市であるバンドンやボゴールからジャカルタに出稼ぎに来ている現地スタッフは、週末の帰省を楽しみにしていた。避暑地でもあるバンドンは、涼しくて環境も良く、ジャカルタとのアクセス性さえ改善すれば定年後に永住したいとさえ思った。

日本製品と日本文化

ジャカルタでは、日本商品を探すことも楽しみの一つである。ユニクロや吉野家など、まだまだ数は少ないが、母国を身近に感じられるスポットは海外生活のストレスを緩和してくれる。日本と全く同じでも、現地風に多少アレンジされていても、異国では話のタネになるから面白い。日本製品の難点は価格が高いことであり、服も文房具も日本の数倍の値段で売られていた。カメラ等の電化製品は日本市場の売れ残りと思われる一世代以上前の品が日本の定価で売られているため、現地での購入は躊躇してしまう。最新型を求める外国人がわざわざ日本に来て、爆買いをする気持ちが良く分かった。

写真7　市民に開放された大通り

写真8　電車の屋根に乗る人々

写真9　老若男女で賑わうJKT48劇場

日本ではアイドルグループのAKB48が人気を博しているが、そのジャカルタ版であるJKT48も確実にファンを増やしており、今や日本から団体客も来る観光名所となっている。日本では色々な意味で敷居が高いが、チケットがプラチナ化する前に訪れてはいかがだろうか。

イスラム教と若者

ジャカルタの朝は早く、午前4時頃から町中に響き渡る大音量のコーランで起こされることもあった。インドネシア人は早寝早起きが原則で、残業は基本的に苦手だ。一緒に働く若い現地スタッフは、イスラム教徒であることを感じさせないラフな格好であったが、日々のお祈りは欠かさなかった。お祈りの度に30分以上は席を外してしまうので、タイミングを間違えると仕事の指示や確認が遅れて困ったことになる。2億人以上の人々が宗教に費やしている時間と費用を考えるともったいない気もするが、日本人の価値観が全て合理的で正しいと思ってはならない。

写真10　高層ビルが立ち並ぶジャカルタ中心部

海外業務の魅力

海外業務の魅力とは何か？　初めは好奇心だけあれば十分かもしれない。しかし、建設コンサルタントとしての経験を積めば積むほど、立派な高層ビルが立ち並ぶジャカルタでさえ、インフラの弱点が見えるようになる。そして、ジャカルタの人々と交流を深めれば深めるほど、温和で親日的なこの人たちの未来に、技術者として貢献したい気持ちが湧いてくる。海外業務の魅力は、技術者の経験や立場によって大きく変わるものなのだろう。

海外業務に魅力を感じ、日本代表として海外に通用する優秀な技術者が今後も増え続けることを期待したい。